

## 認知心理学における表現研究の動向

楠見 孝

本稿では、認知心理学における表現研究の動向を、理論、方法論、トピックの3つの観点から紹介する。近年の認知心理学における表現研究の特徴は、擬音語などの語句、比喩などの文、さらに談話、物語や説明文を理解・表現する認知過程と効果、それを支える語や概念など知識の構造を、人を対象とした実験や調査、モデル化によって解明することにある。

第1の動向は、理論面での展開である。比喩の研究は、認知言語学の影響が大きく、概念比喩、イメージスキーマなどを実証する研究が進んでいる。また、文理解研究では、身体化(embodiment)理論に基づいて、読者の感覚運動的な身体経験が、文理解中のイメージの理解や生成に促進・干渉効果を与えることを明らかにしている。また、物語研究では、読者が物語を読みながら構築する状況モデルに、時間・空間、因果などの次元だけではなく、感情の次元を取り入れて、読者が登場人物の感情の変化をモニターし、共感するプロセスを説明しようとしている。

第2の動向は、方法論的展開である。注目されているのが、脳画像技術(例:fMRI:機能的磁気共鳴画像装置)を利用して、言語表現の認知過程を支える脳の機能を解明する認知神経科学的手法である。これは反応時間、視線、評定などの実験的指標だけでは優劣の評価が難しい理論やモデルの神経科学的な実在性、妥当性を示すことができる。たとえば、比喩を読解するときの文法的逸脱、知覚・運

動感覚的経験や、物語を理解するときの共感・感情が脳のどこの部位に支えられているかを明らかにできる。もうひとつは、大規模な電子テキスト(新聞・雑誌、小説・話し言葉、インターネット上のテキストなど)を用いて、そこに現れる言語表現(たとえば比喩、共感覚表現)の出現とそれらを取り巻く文脈(話者の意図や目的、同時に出現する語句など)との関連性を統計的に解析する試みである。

第3は、教育と関連する読解力の問題である。2010年12月にOECD生徒の学習到達度調査(PISA)の2009年の調査結果が公表された。ここで読解力とは「目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、テキストを理解・利用・熟考し、これに取り組む能力」である。その成績は、2000年のレベルまで改善が見られているが、格差は拡大傾向にある。認知心理学はこうした読解力を支える認知過程(情報アクセス、統合・解釈、熟考・評価)を明らかにするために、たとえば2つの対立する意見のテキストを読ませて、統合する過程の研究を進めている。さらに、こうした読解力を支える批判的思考に注目している。批判的思考には、言語表現の意味や論理構造を明確化し、表現の伝達における効果や適切性を判断するプロセスが含まれている。その点で表現研究においても今後重要なテーマになると考える。

文献

楠見 孝(編) 2010 思考と言語(現代の認知心理学3) 北大路書房

(京都大学)